みつぎ便り

第215号　8月号　令和6年8月1日発行　http://itbs-ecopo.jp/environsurvey_report
板橋区役所南部土木サービスセンターの花づくりグループとエコポリスセンターのかんきょう観察員地域自主活動グループに所属しているボランティア団体「見次の会」です

カマキリの一生

僕はカマキリ、二〇二四年四月のある温かい日に生まれました。三月の桜の咲いている頃、見次公園を散歩していたおじさんが、草むらの枝についていた卵を家に持ち帰ったみたいです。

卵は三cm位の薄茶色で、小さなハチの巣に似ていて地面から一m位の高さにあったようです。雪の積もる地方では、冬の積雪を予想するかのように卵を産み付けると言われていました。最近の調査では、関連がないことが分かったようです。

そのおじさんは卵を大切に家に持ち帰り観察ケースに入れて、僕らが卵から無事にふ化するまで見ることにしたようです。おじさんは首を長くして、僕らが誕生する日が来るのを待っていました。すると四月十二日突然その日が訪れました、僕ら兄弟百匹位が卵から次々と生まれました。それはそれは、すごいやかましさです。

その後、おじさんは公園にやっぱり戻そうと思い、生まれたての僕たちを運んで、そこで放しました。

僕らはこれから自分で生きていかなくてはなりません。小さな昆虫など探し、命をつなぐため毎日のように公園で狩りをして、秋までに成虫になれるよう戦いの毎日です。

秋になると、僕たちは子孫をのこすため、メスは益々食欲旺盛になりからだもお腹も大きくなり、時には残酷ですが、近寄ってくるオスまでも食べることもあるようで油断は出来ません。

そして十月には草や木の枝に卵を産み、その卵が今年訪れる冬の寒さを乗り切り来年の春には、僕らのように新しい生命が見次公園にも誕生することを信じています。

（圭）